

UDC信州
信州地域デザインセンター

2020年度
活動報告書



信州地域デザインセンターとは？

設立の目的

これまで県内各地で多くの活発なまちづくりの取り組みが進められ、成果を上げてきましたが、その一方で、市町村単独で取り組むことには限界もあり、地域が広域で連携して資源をつなぐと共に、協力してまちづくりの担い手を育てていくことも重要になってきています。

2019年8月に設立した信州地域デザインセンター（UDC信州）は、公・民・学が連携した新しい形のまちづくり支援組織として、様々な活動を通じ、「しあわせ信州創造プラン2.0」（長野県総合5か年計画）に位置付けた「未来に続く魅力あるまち」を実現していきます。

理念と活動



構成団体



信州地域デザインセンター長

出口 敦

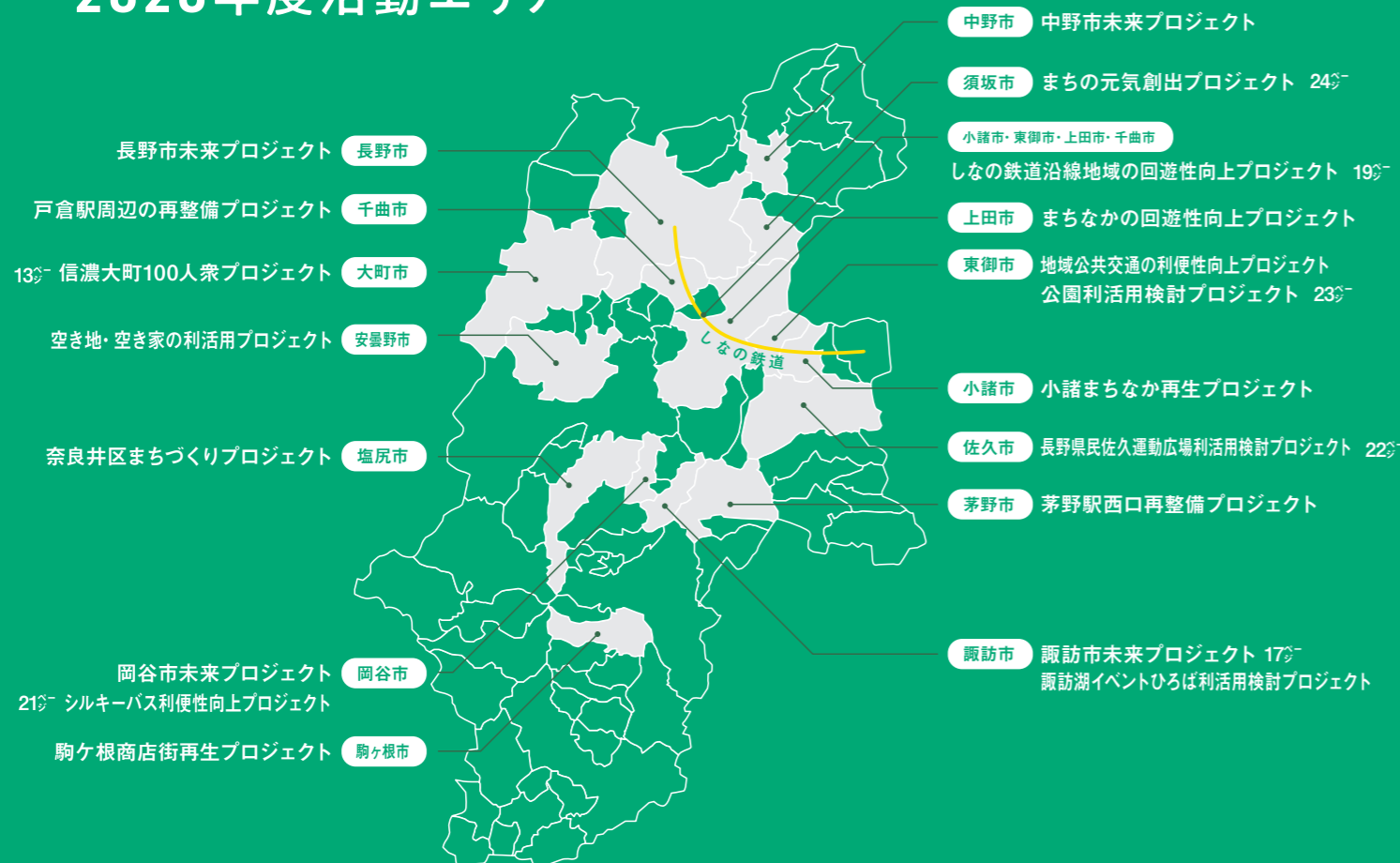
令和2年度は世界中が新型コロナウイルス感染症に見舞われ、長野県内でも厳しい活動制限が求められる中、UDC信州でも感染症対策をしっかりと取った上で、スタッフの方々のご尽力により活発なまちづくりの支援活動が行われてきました。

セミナー等の行事はオンライン対応を進め、9月1日に開催した設立1周年シンポジウムでは、「危機を転機にかえるまちづくり」をテーマに掲げ、東京大学の小泉秀樹教授による基調講演を頂いた後に林靖人副センター長のファシリテートによるパネルディスカッションを通じて、コロナ禍におけるライフスタイルの変化と長野県下での取組についてご議論頂き、ポストコロナの時代に向けた新たなチャレンジへの示唆を頂きました。

5回にわたる「まちづくりセミナー」では、県内の市町村の方々にご参加頂き、交通や防災とまちづくりをテーマとした講演と活発な意見交換の場を提供して参りました。また県内の多くの市町村からまちづくり支援に関するご相談を頂いており、スタッフの方々に対応を進めて頂きました。コロナ禍においても各地で抱える課題対応の手を休めることはできず、まちづくりへの要請は日増しに高まっていると感じております。また、アフターコロナ社会のビジョンを模索しながら進めなければならない、極めて難しい局面を迎えていると言えます。

コロナ禍の中、熱意をもって取組んで頂いたスタッフの方々、関係者の方々、ご協力頂いた方々に感謝申し上げますと共に、引き続きのご協力をお願い申し上げます。

2020年度活動エリア



CONTENTS INDEX

- | 信州地域デザインセンターとは？
- | 2020年度活動エリア 1
- | センター長からごあいさつ
- | CONTENTS INDEX 2
- | 特集 オンライン座談会
「信州の暮らしwith COVID-19」 3
- | 特集 アンケート
コロナ禍でやめたこと・はじめたこと・
変わらなかったこと 10
- | UDC信州 TIME LINE 11
- | 支える 活動報告
信濃大町100人衆プロジェクト
(大町市) 13
- 諏訪市未来プロジェクト・
諏訪湖イベントひろば利活用検討プロジェクト
(諏訪市) 17
- しなの鉄道沿線地域の
回遊性向上プロジェクト
(小諸市 東御市 上田市 千曲市) 19
- シルキーバス利便性向上プロジェクト
(岡谷市) 21
- 長野県民佐久運動広場利活用検討プロジェクト
(佐久市) 22
- 公園利活用検討プロジェクト
(東御市) 23
- まちの元気創出プロジェクト
(須坂市) 24
- | 育む 活動報告
まちづくりセミナー/
設立1周年シンポジウム 25
- | 発信する 活動報告
あるつくトーク 27
- | おわりに
UDC信州スタッフより 29

特集

オンライン 座談会

信州の暮らし with COVID-19

全国初・広域型UDCとして長野県に当センターが設立され約半年を迎えた2020年春。新型コロナウイルスの感染が拡大し、移動が制限され、ひとつの場所に集まって時間を共有したり、関係を構築するための余白を持つ機会が失われてしまいました。従来通りの“まちづくり”だけでは推進できない状況に立たされた1年の記録を残すべく、2020年度UDC信州活動報告書では、コロナとともに歩んだ信州の暮らしを「オンライン座談会(2021年3月9日実施)」と「アンケート」にまとめました。コロナ禍でやめたこと、はじめたこと、変わらなかったことを中心に、これからの信州のまちづくりを考えていきます。

新 今回の進行役の新です。長野市で暮らしながら東京大学の教員をしています。早速今回のテーマ「信州の暮らし with COVID-19」を様々なバックグラウンドの皆さんとざっくばらんに話していけたらなあ。さて、東大は5年前から小布施町で研究活動をしてたんですけど一切できなくなっちゃって。どうやって進めていこうかと悩んで、役場の方とお話をしてみると小布施出身で首都圏に行けない大学生たちが小布施に残っていたんですよ。

大塚 そこか〜!

新 その子たちに声をかけたら11人ぐらい来てくれて。それで現地調査ができるようになりました。Slack、Zoomなどのデジタルツールを駆使しながら、東大生たちはリモートでサポートする形でオンラインとオンサイトで、今までつながれなかった地元出身の学生たち【写真1】とつながることができたんです。いま大学ではこんなことが起きてますが「コロナでやめたこと・始めたこと」について、まずはシニア活動推進コー

ディネーターをされてる大塚さん、ご年配の方々はどうのように乗り越えてきたのかお聞かせください。

県シニア大学は全学部休校… シニア世代の生きがいは?

大塚 一番リスクなシニア世代なので、ご本人たちも怖くて出かけられない。県シニア大学は県内の10学部全校の年間休校が決まりました。もちろんサロン活動やお茶っこ、ボランティア活動も一切できなくなっちゃった。去年の4月くらいから何もかも中止やお休みになって一体どうしたらいいの?って。とても悲しかったですね。調理室を借りてお料理教室をやっていたグループは解散寸前です。

新 解散寸前ですか?

大塚 もうどうしようもないことだったんです。自分が発症者にならないように努力をしつつ。それが「やめたこと」です。でも諦めない人たちがいた!マスクが全然なかったじゃないですか。自分用のマスクだけでなく子供や孫のためにおばあちゃんたちチクチク作るんですよ。だったらマスクのない状態で困ってる人のために作ってあげて、マスクの下の顔も笑顔になる

うって「スマイルマスクプロジェクト」というのが全県で同時多発的に始まりました。おばあちゃんたち裁縫で玉結びするとき舐めるだよね。感染症対策で舐めちゃだめだよっていうことを笑い話で伝えながら(笑)。あと材料の調達で奔走すること自体が生きがいにつながって。集まって作りたのは山々ですけど型紙から切る人、ゴムをつける人って分担作業にして形にしたグループもありました。電話しながら「どこまでできてる?」「どこまでできてるから取りに行くわ」っていう触れ合いは途切れなかったようですね。

「コロナ禍」と「信州へ移住」 が重なって

新 柳澤さんは2020年6月、おじいちゃんの地元でもある佐久市にいわゆる孫ターンされましたが、地域の方々との関係などどうですか?

柳澤 僕は東京生まれ東京育ち、おまけに東京のまちづくりを仕事にしていたので、「ふるさと」が元々なくて。これからどこを故郷にするか?って時に長野県佐久市が自分のルーツとしてあ

登壇者プロフィール紹介・アンケート

【アンケート】 Q1▶コロナ禍でやめたことは? Q2▶ コロナ禍ではじめたことは? Q3▶ コロナ禍でも変わらなかったことは?



おおつか かおり
大塚佳織さん

(公財)長野県長寿社会開発センター
シニア活動推進コーディネーター
シニア世代が培ってきた豊富な知識と経験を生かして、いくつになってもそれぞれのステージでその人がその人らしく、役割を持って活躍できる場を、多様な組織や、団体と連携しながら作っていきます。
▼長野県長寿社会開発センター HP
<https://www.nicesenior.or.jp/withcorona/>
【アンケート】
Q1▶ 行政の決定に従って、できないことはありました。Q2▶ オンラインを活用したイベント。会場参加も合わせたハイブリッド開催。企業と協働して、シニア世代向けのスマホやZoomの講座を開催した。
Q3▶ 全県に配置されたコーディネーターの情報交換。毎月オンラインで開催。今までもより密になったかも。



かしもとこうじ
榎本浩二さん

NEC長野支店
大阪府堺市生まれ。信州大学卒業。就職で、東京へ。40歳を越えてから、学生時代を過ごした信州へ移住を具体的に検討。44歳で晴れて信州人に。
【アンケート】
Q1▶ 飲み会に行かなくなりました。あと、東京出張ははけません。
Q2▶ 日曜大工、比較的近所でリゾートレワーク。
Q3▶ 仕事の量。



きみじま ゆみこ
君島祐三子さん

HAKKO MONZEN責任者
千葉県出身。東京の大学をでて、家庭用品メーカーで働いた後、結婚を機に長野へ移住。現在は、長野の発酵食を創作料理として提供する「HAKKO MONZEN」の責任者として日々、奮闘中。長野に来て、野菜や果物の美味しさに感動しています!
▼HAKKO MONZEN instagram
[@hakko.monzen](https://www.instagram.com/hakko.monzen)
【アンケート】
Q1▶ 店舗営業を一時休止。「店内でお客様がお食事をする」という当たり前の光景がなくなり、あの時はどうしたらいいの?と。Q2▶ テイクアウト営業への切り替え。お弁当が販路拡大のきっかけに。
Q3▶ コロナ前から計画していた新店舗を予定通りオープン!社長や社員の前向きな気持ちと熱意は、コロナ禍でも変わりませんでした。



つちかわおさむ
土川修さん

塩尻市榑川地区奈良井区長
生まれも育ちも奈良井。一時期東京に上京していたが、父親の病気を機に地元奈良井へ戻り、旧榑川村役場に就職。34年間勤務し、退職後、奈良井宿の地域づくりに携わり、現在に至る。
【アンケート】
Q1▶ 地域とのコミュニケーションがとりづらくなった。地域の行事がなくなった。お祭り等でつながっていたコミュニティがなくなってしまった。Q2▶ コミュニケーションの取り方を工夫するようになった。「広報ならい」の発行を多くしたり、手紙によるやり取りなどアナログツールでコミュニケーションをとるようになった。Q3▶ 手段は違えど、家族や仲間とのコミュニケーションは変わらず続けている。



やなぎさわたくじ
柳澤拓道さん

SAKU SAKU SAKK
まちづくりコーディネーター
独立行政法人都市再生機構(UR)及び国土交通省にて、都心のまちづくり事業推進の業務に従事。東京一極集中に限界を感じ、URを自主退職し、佐久市に家族移住。地域の可能性に真摯に向き合うプロジェクトを組成中。
【アンケート】
Q1▶ オフィスへの出勤
Q2▶ 移住とフルリモートワークの実践
Q3▶ 人との繋がり。リモートワークだからこそ重要なコミュニケーション。



しんゆうた
新雄太さん

東京大学大学院工学系研究科 特任助教
UDC信州アドバイザー
神奈川県生まれ。東京藝術大学大学院修了後、スイスの建築設計事務所にて勤務。帰国後信州に移住し、信州大学研究員を経て2017年〜現職。県内各地の地域づくりに携わる。2021年日本建築学会教育賞。
【アンケート】
Q1▶ 長距離通勤、印刷、飲み会、スーツ、ワークショップ、旅行 Q2▶ 隔たり、オンライン授業、在宅勤務、新たなデジタルツール(Zoom、Slack、Miroなど)、家族との時間、土日が休み、運動不足 Q3▶ 繋がり、コーヒーとチョコ



写真1 地元出身学生と調査や写真展を実施



写真2 望月高原牧場でワーケーション

るから移住してきたんです。移住前は毎日9:15に出勤して17:40に定時という「the サラリーマン」生活をしてきたんですけど、コロナとは関係なく自分の働き方を含めて疑問を感じてました。移住して地方の仕事しようと思ってた中でたまたまコロナが起きた感じです。緊急事態宣言が2020年4月に出てから5月までは東京のマンションに閉じ込められてました。4歳の子供がいるんですけど、保育園も行ってダメな状況の中、2ヶ月間は自宅で働いてたんですけど、東京で暮らすことの危うさをヒシヒシと感じました。6月の移住はもう決まっていたので早く脱出したい!と思ってました。佐久市に来てフルリモートの勤務スタイルにしてもらい、コワーキングスペース「ワークテラス佐久」を運営しながら、家でも働けるし、アウトドアでもできる!“働くこと”と“地方での暮らし”をフルリモートで掛け合わせて同時に始めてみたという感じですね。

新 これ写真2はどこですか?素敵な景色!

柳澤 これは望月高原牧場で、アウトドアのワーケーションイベントをやった時の写真です。あと、写真3はせっかく地方に来たから東京で絶対できないことをやろうと思って田んぼの前で演奏会をやってみたんです。趣味でチェロをやっていて、東京にいる時、練習はマンションの部屋、本番はコン



写真4 コロナ前の奈良井地区のお祭り「鎮神社例大祭」



写真3 田んぼで演奏会

サートホールでしたけど、地域資源を活用してもらいながらアートを解放してみたくて。地方ならではの場所づくりを探求しています。

大塚 軽トラがいい味出してること!
柳澤 そうなんですよ!たまたまその手前の田んぼのおじちゃんが軽トラで入ってきちゃって…

400年続くお祭りが中止に…

新 年間を通じて地域の集落の皆さんが集まる場所や機会がいろいろとあると思うんですけど、塩尻市奈良井宿の区長をされている土川さん、奈良井はいかがでしたか?

土川 奈良井では8月に夏祭りがあって、1ヶ月前から若い人たちが集まってお囃子を練習する機会がありますが、今年はお祭り自体を中止に。400年続いてきて戦後1度だけやめたことがあったそうなので、400年のうちこれが2度目の中止になっちゃいましたね。地域のお年寄りたちが夏の風物詩としている音が聞こえてこない

非常に残念がっていましたね。

新 それは大きな決断でしたね…。

土川 このお祭りを執り行っている神社は、かつて宿場に流行病があってそれを治めるために千葉県の香取神社の主神をまねき祭祀をはじめた場所だそう。だから名前も「鎮神社」。コロナの状況に似たことが江戸時代にもあったようなので、400年前の人たちも今の私たちと同じような思いでやってたのかな?という話題がお茶飲み話でよく出ました。

新 今の奈良井の人口が、上・仲・下全体で630人くらい。ただお盆の時は旅館もすべてお休みにして親類縁者が全国から戻ってくると3,000人くらいになると。

土川 そうですね、3~4倍くらいになりますね。

新 そうなるとちょっと密になっちゃうからどうしてもやめざるを得なかった。

土川 それが一番切ない。

新 400年も続いているお祭りを中

止するということに対して地域の反響はいかがでしたか?

土川 お祭り全体はやめたんですが、若い人たちが「コロナだからこそやろうよ」と、最低限の人数でお神輿を出して境内を周りました。お祭り好きな所なものですから。あと、女性たちはお祭りが中止になって喜んでましたね…(笑)。ここは誰が来てもご馳走するところなので…。

新 おもてなしですね。

土川 お祭りは無礼講でいくものですから。お囃子をしながら一軒一軒寄ってお酒やご馳走をいただくところなんです。写真4。観光客の方も自由に入れますし。

新 直会ですね!

土川 朝から夜までずっとご馳走を作っておもてなしをしなくちゃいけない、そういったことがなくて非常に喜んでいました。女性たちは「来年も!」なんて言っています。(笑)

大切なスタッフたちのため 新しいスタイルに挑戦

新 北信エリアを中心に4店舗の飲食店を運営されている君島さんには、やはりたくさん影響があったんじゃないでしょうか?

君島 近くに地獄谷温泉がある山ノ内町の2店舗は、インパウンドの影響がかなりあって。2020年3月末ぐらいから徐々にコロナが流行りだして各

店舗売上が落ち始めて2020年4月から各店舗ほぼ休業にしました。少人数のお客さまもちろん大切ですが、夜の宴会の売り上げが8割くらい占めていたし、ウェディングの2次会なんかも全く無くなっちゃったので…

新 そんなに大変だったんですね。

君島 4~5月の緊急事態宣言時は補償もあったので休業を決断できたんです。でも新店舗で補償対象外のHAKKO MONZEN(長野市)だけはテイクアウトを続けていました。それで徐々に店内にお客さんを入れていくような感じで…そういう現実ですね。

大塚 噂では聞いてたけど、初めて生の声聞いた。

君島 第1波の時はまだマンで。2回目の緊急事態宣言では長野県が対象外だったから経営的に考えると補償が出る緊急事態宣言が良かったというのが本音です。少しでもスタッフが離れていかないように販売先を考えて写真5みたいに「売りに行く」スタイルをはじめました。この時は知合いのつながりがあって銀行でお弁当を販売しました。あとは近隣の宿泊施設とのコラボ企画にも挑戦しました。写真6。お声掛けいただいた1166バックパッカーズさんはドミトリー形式の宿で、基本にお食事はつかないんです。GoToトラベルを利用して宿泊されるお客様に安心して滞在してもらいたいという想いからHAKKO

MONZENのお弁当をセットにした宿泊プランと一緒に企画してみました。飲食業だけでなく宿泊業も厳しい時期だったのでお互いに支え合って今に至るって感じですね。

新 これまでの繋がりや関係性で助け合っていたらいいですね。新しい制度なんか色々知らなきゃいけないし、でもやってみないと分からなかったり。相当大変だったんですね。

君島 はい。新しいことばかりで。そんな中お客さまたちもいろいろ応援してくれてお弁当を買いにきてくれる方が多かったのはありがたくて。あとはコロナ禍になってから2FのUDC信州から賄い制度のご提案をいただいて!コロナの時はお客さまが1人でも来てくれれば嬉しかったので賄いの制度があると売り上げの底上げをしてくれたので頼ってました。

新 すごい美味しいんです、HAKKOさんの食事って!

大塚 行きたい!食べたい!飲みたい!
新 NEC長野支店にお勤めの榎本さん、会社での飲み会はだいぶ減ったかと思うんですけど、いかがですか?

榎本 サラリーマンは飲み会でお金を使わなきゃいけないと思うけど、飲み会で誰か陽性者が出たとなると店を閉めないといけない。その時のダメージは億単位になってしまう。なので残念ではありますが飲み会はなくなりました。職場が長野駅東口にあって



写真5 銀行の一角でお弁当を販売



写真6 1166バックパッカーズさんとコラボした宿泊プラン



写真7 コロナ禍で始めた日曜大工で作った棚

昼飯問題が大変なんです。食べるころがないので。みんな昼飯難民になって、コンビニが密になっちゃった!なので事務所で「Uber Eats ってどうやるの?」って。

新 使っていましたか?

榎本 やってましたね。あと、在宅勤務で家にいる時間が多くなったのと、家を建てたときに大工さんの発注ミスかなんかで大量の木材を置いていて使っていいですよって言われて、日曜大工で棚を作りました(写真7)。

君島 すごーい!

榎本 最初は薪ストーブでその木材を燃やしてたんです。だけどせっかくだから何か作ろうと思ってるんな電動工具を買って作り始めたっていう感じです。

信州ならではの

リモートワーク!?

新 リモートワークはどうですか?私もずっとやっていて本当に疲れちゃって。

榎本 NECは2020年東京オリンピックを想定して全社員がテレワークできる環境にするために整えていたので、すぐにできる状態ではありました。私は長野県在住ですが東日本全体を管轄していて、同僚は札幌・仙台・大宮・新潟・郡山にいます。なのでオンラインで会議や討論をずっとしてるんですよ。私も柳澤さんみたいなことしていて、気晴らしに白馬から会議に出たり。東京や大宮の同僚はみんなマンションの小部屋で悶々と仕事してるので羨ましがられましたね!

新 毎回リアル背景が違うわけですね?

榎本 そうです!「お前きょうどこにいる?」「今日は白馬です」とか。結構上のほうまで行っちゃって電波なくなつて慌てて降りてくるってこともありました。

新 いいな~素敵だな~!そういう意味では柳澤さん、ワークテラス佐久は佐久市周辺の皆さんは結構使われるようになりましたか?

柳澤 おかげさまで!去年(2020年)4月の開館当初は月額会員が9人だったんですが今4~5倍ぐらいまで増えました。この施設はコロナ前から計画していたので、たまたまコロナが追い風みたいな形で時代に合った感じ。

新 在宅勤務によって家族との時間が増えたからいいなあと思う一方で、働く場所と生活をする場所が一緒になることでなかなか難しい部分もあるので、こうした場所はいいですよ。

やめる勇気・やる勇気

新 ご年配の方たちの居場所にはどういう変化がありましたか?

大塚 当初は集まらない前提があったんですけれども、シニアの皆さんはなかなかしたたかです。「外だったらいいじゃん」って。

新 あーなるほどね!

大塚 児童センターの中には入れないけどボランティアで外の草刈りならできるじゃん!とか。できることを見つけられるんですよ。シニアの皆さんが言っていたことは「やめる勇気・やる勇気」。今まで通りできないんだから工夫しながらやる。だけどダメだってやめる勇気を両方持ち合わせていかないと乗り切れんと。どっちを選んだとしても誰のせいでもないし、誰が責任取るっていう話でもないの。できる対策はしつづダメだったらやめ

ようじゃねーか。踏まれても踏まれても立ち上がる力はやっぱすごかったですね。とある93歳の方に緊急事態宣言時に安否確認でお話を聞いたところ「だってマスクしてれば上から爆弾が降ってくるわけじゃないでしょー?」って。戦争体験者って強いんだよね。それにオンラインが大流行になっちゃって!

新 あ、それ聞きたかった!

大塚 ソフトバンク(株)さんと県が包括連携協定を結んでいてスマホアドバイザーを迎えて、シニア向けスマホ教室をやったんです。そしたらスマホだけじゃなくて「Zoom」をやってみたいねって話になって、今Zoom教室を展開してます。ただ、使い始めがわかりにくいと、PC設定のお手伝いはして、1回体験してもらおうとできるようになって。それから県内10か所を結び会場+オンラインのいわゆる「ハイブリッド型」講座も開催しました。これをきっかけに横浜のお孫さんの授業参観をスマホでできたわってという80代の方がいらっしやったり、シニアの皆さんもこれなら出来るんだってという次の一歩が踏み出せて。でもやればやるほどリアルに会いたいね!っていう気持ちが募るんです。オンラインは便利ではあるけれど根っこにあるのは会って触れたいおしゃべりをしたい。

新 いやほんとZoomを通じてむしろ絆が深まっているんじゃないかなと思うくらい。

榎本 こういう機会にICTが便利だって思ってくれることがすごく大事ななと思ってます。

簡単につながれるようになってもあえてアナログ

新 土川さんはコミュニケーションの取り方などに変化はありましたか?

土川 奈良井ではあえて広報誌の発

行を多くしています。できるだけ細かな情報を皆さんに共有してもらいたくて会議で決まったことを必ず出します。私は小さな宿をやっていて、海外から毎年宿泊してくれるお客さんがいるんです。皆さんいつもはクリスマスカードを送ってくれていたんですが、最近は近況を書いた長い手紙をくれて。ちょっと時代に反しているかもしれないけど「伝えたい」という気持ちが原点に戻ってる。忙しいからメールじゃなくて、あえて時間をかけて手紙を書くことが増えたのかな。

新 それは本当に素敵ですね!

土川 写真8は毎年2月3日にアイスキャンドル祭りっていうのをやるんですよ。この時期は本当に寒いんです。だけど若い人たちが寒いなら寒いことを楽しもう!と、バケツに水を入れて凍らせてから口ウソクを立てて。だいたい1500基ほど並べるんです。

新 重伝建の町並みの中に1500基?

土川 まちの暗い通りにブワッと

君島 えー見てみたい!

コロナがあっても

変わらなかったこと

新 これまでうかがった中でポツポツとコロナでも変わらなかった根っここの部分の話もできてきました。改めて「変わらなかったこと」はなんですか?

柳澤 リモートワークの時代に合った施設を作ってますけど、そうは言ってもやっぱり人とのつながりがないと最終的には温かい関係になれないの。かなって思っていて。この座談会みたくにリアルでなかなか会えない人たちでもオンラインで一堂に会するメリットがある一方で、これを繰り返してすごい仲良くなれるかという難しいかなど。さきほどのやめる勇気・やる勇気と同じで、コロナの状況を見ながら現地に人をお招きするリアルのイベン

トをやっています。例えば望月高原牧場で首都圏の人対象で「ローカルシフト」をテーマにイベントをやりました。先に移住している人の話を聞いて自分なら地域でどんなことができるのかをみんなでディスカッションしたり、コロナに注意しながらみんなで一緒に食べて語り合う時間の大切さを痛感しました。リアルなつながりをこれからも追求していきたいなと思っています。これからの時代は少人数で深くつながりその深くつながった仲間たちがそれぞれで広めていく。小さくローカルなつながりを目指していきたいなと実感しています。

新 こんな時でも私たちはクリエイティブなんだってことを示してくれているような活動ですね。大塚さんいかがでしょうか。

大塚 私たちコーディネーターはシニアの人たちの活動が途切れないように、こんな時だからこそより丁寧に次に向かっての工夫をその時の状況に合わせて話し合うことで前を向きました。諦めずにこんな工夫はどう?あんな工夫はどう?ってやってみて「あ、失敗だったね」っていうのも全部プロセスにして。実際ダメなものはダメっていう体験もありました。ITツールの活用もしつづ歩みを止めないっていうことはやっぱり一番大事。今年の経験は必ず次にも生きていくので蓄積は続けていかなきゃいけないんじゃないかな。

新 本当にそうですね。土川さん、奈良井はいかがですか?

土川 一番基本にあるのは奈良井宿っていうのはコロナがあろうとなかろうと変わらない。そこに住んでる人たちも変わらない。ここは結構雪が降るので冬は朝7時から必ずみんなで雪かきをします。空き家の前でもかいて全部運び出します。これは市を頼りにしてるわけじゃなくて昔からやってい



写真8 奈良井地区アイスキャンドル祭り

ることです。

大塚 すごいそれ!

土川 誇れることです。お年寄りも「ご苦労だね」って声をかけたり、女性も職場行く手前で「ちょっと手伝うね」って雪積んでくれる。これが非常にいいなあと思ってるんですよ。“嫌な雪”と考えるのではなく地域づくりに役立ってるんです。アイスキャンドル祭りもそうですけどやっぱり良い方向に向いていくことが地域づくりの鍵でこれを続けていくってことが町並みを守っていくベースになるんじゃないかと思っています。

新 みんなで一緒に手入れをしあう、関係し合う時間がしっかりあるんですね。

土川 学校の教室を消毒するボランティアにもたくさんの方が集まってね、毎日学校を全部消毒しに行くんです。

新 そうやって多世代で助け合ってる。会えないけど誰かの役に立っているっていうその繋がり方素敵ですね。

土川 一番嬉しいのはね、地域の子が電車の中で行き合ったとき「あ!こんにちは」って一言。そういうコミュニケーションがうれしくてね。

大塚 奈良井行きなくなっちゃった!今度行ってもいいですか?

土川 是非!

新 あったかいですね。そういう関係性が変わらずに残ってるっていうの

が素晴らしいですね！
君島さんいかがでしょうか？
君島 コロナでお店が休みになってたけどスタッフはついてきてくれたことが一番大きいですね。一人としてコロナで辞めなかった。うちの会社は経営者とスタッフが親身で家族みたいな繋がり方をしているので、むしろスタッフとどうしたらいいかって相談をして営業スタイルを決めてきたし。本当にスタッフに助けられた一年だったなあと。なのでこれからも働いてくれる方々を大事にすることが一番かなって思っています。コロナになって学生さんのアルバイトを入れてあげられてないんですけど、それでもお店に貢献って言って食べに来てくれるんですよ。スタッフの温かさを感じる

1年でしたね。
新 なるほど、一番近い人同士の紐帯が強まったんですね。
榎本 私は許してくれる限りコロナ禍でもお客さんのところに顔を出します。ちょっと今風ではないのかもしれないですけど。ものが有るところには人がいて、その場に行くことが大事。五感で感じ取れることってとても大事で、それを伝え切れるICTって存在しないんだらうなって思うんです。そんなことを思いながら仕事をしています。
新 皆さんありがとうございました！これほど信州のコミュニティが密だったんだと再確認できたのと同時に、それでも皆さんそれぞれの分野で工夫があっみんな頑張ってるって暮らされているということがよくわかりました。本当

に勇気づけられました。おそらくここには紹介しきれないくらいのいろんな想いやつながりが信州各地にあったんじゃないかなと思います。UDC信州としても今後そういったものを知り大事にしながら、地域の皆さんと同じように向き合っていけたらなと思っています。
大塚 是非皆さんに会いたい！お訪ねして回りたい！
榎本 いつも言ってるのそこなんです！会いたいと思わせることができる。そこまでがICTの仕事なんです！
新 それでは、皆さんお会いできるのを楽しみにしています！
全員 バイバイ！



オンライン座談会の最後に手話で「バイバイ〜！」

座談会「信州の暮らし with COVID-19」を終えて

座談会でもあったように、先人たちは人災・自然災害・疫病など様々な困難が繰り返し降りかかってコミュニティの中で助け合い工夫を凝らしながら（時には神頼みもしながら）乗り越えてきました。コロナ禍で社会的価値転換が起きている反面、長い時の流れから見れば、膨らみ過ぎた世界を見直すきっかけなのかもしれません。人との温かいつながりを求めてしまうことが人間の性だとしたら、ICT技術の恩恵を手軽に享受できるこの時代。アナログも含め、人とつながるための選択肢は無限大です。今回の座談会で、「新しいことに挑戦するクリエイティビティ」と「人とのつながり」が改めて大切であり、これは先人たちから知らないうちに脈々と受け継がれている、ということまで実感できました。

そして私たちUDC信州は、未来の信州のために、皆さんの創造力をくすぐる場やつながりを生み出すお手伝いをしなければならぬと改めて気づかされました。ご協力いただいた皆さま、有意義な時間をありがとうございました！

(コーディネーター：佐久間)

特集 アンケート with COVID-19

UDC信州は、まちづくりに関わる人や組織を繋ぐネットワークのハブとなることを目指しており、webサイトの「つなぐ(人材ネットワーク)」では、プロジェクトなどを通じて関わりのある皆様を紹介しています。その方々に「コロナ禍でやめたこと・はじめたこと・変わらなかったこと」でアンケートを実施させていただいたのでここで紹介します。

コロナ禍で やめたことは？

集会・セミナー

- ▶ 集客するイベントはやめました。
(塩尻市地方創生推進課・官民連携推進室 古畑久哉さん 他)

出張

- ▶ 都会へ出張、研修会参加などの都市間移動を控えました。
(大町市建設課 他)

飲み会・宴会

- ▶ 情報交換を目的としたお客様との飲食、友人・同僚との飲み会
(アイシン精機株式会社 野々山茂男さん 他)

その他

- ▶ 通勤、出張、対面での会議、電話、紙資料の作成・配布
(あいおいニッセイ同和損害保険株式会社)
- ▶ 集会の規制(学年単位のみ可能)、卒業式の保護者参加(2020年3月は不可、2021年3月は1名のみ)、卒業式の在校生参加、文化祭等学校行事の規模縮小
(長野県大町岳陽高等学校)
- ▶ オフィス通勤(植竹理江さん)
- ▶ 過去を振り返ること
(株式会社ふるしきや 田村英彦さん)

オンラインツールの活用 ウェビナー・テレワーク・オンライン会議 など

- ▶ オンラインミーティング、オンラインイベント、社内チャット
(株式会社アドイングロ 石黒ちとせさん)
- ▶ ウェビナーなどオンラインイベントの開催
(シソーラス株式会社 吉川みのりさん)

コロナ対策

- ▶ マスクの着用/アルコール消毒液や除菌シートの常備
(株式会社日本海コンサルタント 片岸 将広さん 他)

新規事業

- ▶ 空き地利活用事業、移動販売車事業、テレワーク事業
(一社〇と編集社 赤羽孝太さん 他)

コロナ禍で はじめたことは？

その他

- ▶ 早朝出勤(時差勤務)、狩猟
(長野市市街地整備課 遠山 健幸さん)
- ▶ 大型バイクにまたがって、近くの道の駅に行き野菜を買うこと。
(大町市建設課 松田紀幸さん)
- ▶ オンライン、ツアー、分散型観光、マイクロツーリズム、インバウンド&ATの環境整備
(grav bicycle 小口良平さん)

コロナ禍で 変わらなかったことは？

- ▶ テレワーク等は導入せずに全員が出勤していた
(株式会社アドイングロ 石黒ちとせさん)

- ▶ お客さまからの問合せ対応
(アイシン精機株式会社 野々山茂男さん 他)

- ▶ 基本的に全ての事業は変わっていません。新しい生活様式に合わせて事業を修正したり、新たな事業を始めたりとスケジュールの優先度を入れ替えながら進めています。
(一社〇と編集社 赤羽孝太さん)

仕事

思い・絆

- ▶ 人を想うことが社会事業の原動力であること
(株式会社ふるしきや 田村英彦さん)

- ▶ 地域に対する思い…かな
(一社ノマチ 井出正臣さん)

まとめ

それぞれニューノーマルな暮らしを取り入れつつ、試行錯誤されている点が印象的でした！アンケートにご協力いただきありがとうございました。(2021/3実施)

UDC信州では、まちづくりの課題について地域とともに考え、課題解決に向けて様々な支援を行っています。
長野県総合計画「しあわせ信州創造プラン2.0」の実現に向け、設立以来、県内各地で様々なまちづくりの企画提案、助言、事業推進支援に取り組んできました。ここでは、2020年度の主な活動を紹介しします。



信濃大町100人衆インタビュー最終発表会

信濃大町100人衆プロジェクト 大町市

【概要】

大町市では、定住人口の減少や少子高齢化の進行（2020.3.31現在の高齢化率37.7%）等により、中心市街地の空き店舗が増加しています。また、これに伴い中心市街地の歩行者・自転車通行量も年々減少しており、平成22年と平成30年を比較すると、休日で-56.5%（H30:641人）、平日で-62.6%（H30:944人）となっています。大町市では、これまでに中心市街地活性化基本計画を策定し、空き店舗活用事業や地域文化を活かしたまちなか再生事業など、様々な取り組みを



部局横断チームでのグループワーク

行ってきており、空き店舗の活用などが徐々に増えてきています。ただし、依然として空き店舗は多く、中心市街地の再生が大きな課題となっています。

【UDC信州の支援】

現在、大町市には、「庵舎を考える会」「信濃大町まち守舎」など、地域でまちづくりを進める団体や個人が多数存在しています。「大町市を良くしたい」という想いは同じであるものの、まだ官民がうまく連携できていない状況です。上述のとおり、「中心市街地の再生」は大きな課題ではありますが、「こんな場所にしたい」という具体的かつ共通のイメージがなければ連携できません。そこでUDC信州では、市役所内に組織された横断チーム（総務部、産業観光部、建設水道部等の部署横断チーム）とともに、公・民・学が連携したまちづくりプラットフォームの構築を目指し、共通のイメージとなる「未来ビジョン」の策定に向けた支援をしています。

基本情報

- ①大町市 ②約27,000人 ③565km²
- ④黒部ダム・立山黒部アルペンルート、仁科三湖
- ⑤若一王子祭り、北アルプス国際芸術祭
- ⑥黒部ダムカレー、おやき

- ①市町村名 ②人口（2021年4月1日現在） ③面積
- ④主な観光地 ⑤主な祭り
- ⑥ご当地グルメ・郷土料理



【未来ビジョンの実現に向けて】

大町市のまちなかには、気づいていないだけでたくさんの魅力があります。そんな魅力を活かして大町市をもっと良いまちにするにはどうしたら良いか。地域の人たちが同じ方向を向いて、自分ゴトとしてまちづくりを進めていく、そんな地域の共通イメージとなる「未来ビジョン」の策定とその実践を目指し、プロジェクトが立ち上がりました。未来ビジョンの実現のためには、まちづくりを実践する“人”とまちの将来や夢を語り合うことができる“場”が必要と考え、公・民・学が連携したまちづくりプラットフォームの構築に向けて、「信濃大町100人衆インタビュー」と「信濃大町100人衆会議」の2つを軸にプロジェクトを進めています。



探究授業の様子

プラットフォーム構築

R2.8月～
大町岳陽高等学校 地域探究プロジェクト2020
信濃大町100人衆
interview

まずは“地域人”のを知る

- ・地域の魅力＝地域人と捉え、取材を通じて大町の魅力をあぶり出す
- ・地域の人がお互いのことを知るきっかけづくり

R3.2月
信濃大町100人衆
conference

まちの将来像を描くためには、

- ・まちの将来や夢を語り合う場づくりが必要
- ・まちで活動する“地域人”（＝信濃大町100人衆）が一堂に会す

信濃大町100人衆インタビューは継続して実施
まちづくりを担う“地域人”の輪を広げていく活動へ

R3.4月～
中心市街地のまちづくりに向けた
未来ビジョン策定&実践

地域のみならずまちづくり

- ・みんなが同じ方向を向いて、まちづくりを進めるためのまちの将来像を創る
- ・地域の人々が、自分ゴトとしてまちづくりを実践

図1：信濃大町100人衆プロジェクト プロセス図

「信濃大町100人衆」は、江戸時代、まちを守り支えた10軒の有力者とされる「大町十人衆」に由来しており、現代の十人衆として、まちを考え、まちを創っていく人たちが集まり、まちづくりを担っていくことを願い、名付けられています。（図1：信濃大町100人衆プロジェクト プロセス図）

○信濃大町100人衆インタビュー

信濃大町100人衆インタビューは、“地域で活動している人（地域人）＝地域の魅力”と捉え、地域の将来を担う高校生たちが地域人たちへのインタビューを通じて、大町の魅力をあぶりだし、大町市内外へ発信していくことで、大町の資源である“人”の魅力を地域みんなで共有する取組です。



地域人へのインタビュー風景

大町市の中心市街地では、近年、地ビール工場兼ビールバーである「北アルプスブルワリー」などの新規創業や、「北アルプス国際芸術祭」といった芸術イベント開催など、まちなかで新しい活動が次々に生まれてきています。どんな人が、どんな想いで、どんな活動をしているのか、まずは、地域の人々がお互いのことを知るきっかけづくりから始めています。

○信濃大町100人衆会議

信濃大町100人衆会議は、インタビューを通じて集まった地域人たちが一堂に会し、大町の将来ありたい姿をともに描き、未来ビジョンを策定していくための場づくりとして位置付けています。また未来ビジョン策定後は、その実現に向けたまちづくり活動を中心となって進めていく母体を担っていくことが期待されます。

2020年度は、国土交通省「令和2年度官民連携まちなか再生推進事業」の採択を受け、主に「信濃大町100人衆インタビュー」に取り組んできました。共同研究にて大町市と関わ

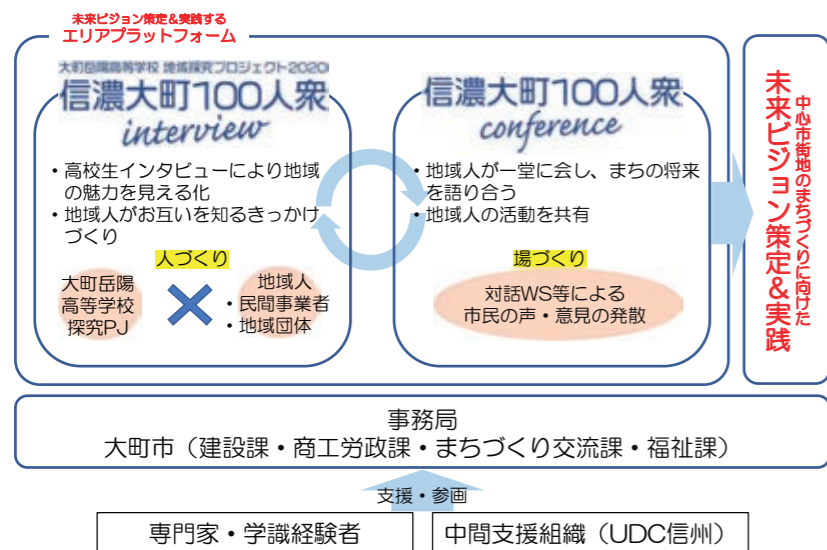


図2：信濃大町100人衆プロジェクト 検討体制図



完成したブックレット

りのあるUDC信州の新アドバイザーとともに、UDC信州が事務局のサポート役として参画することで、プロジェクトの企画や関係者調整、検討体制構築などを支援しました。

(図2：信濃大町100人衆プロジェクト 検討体制図)

【2020年度の取り組み】

市内唯一の高等学校である長野県大町岳陽高等学校では、地域で学び地域で実践する協働型の学びの場「地域探究プログラム」において、これまで大町市と様々な協働活動に取り組んできており、そのつながりもあって、信濃大町100人衆インタビューに参画してもらうこととなりました。

この企画に興味を持った普通科・学芸科の2年生10名が参加し、地域で活躍されている美麻オリザ編集工房の稲澤博さん・そし恵さんご夫婦（ライター、カメラマン）、株式会社エイブルデザインの高橋和也さん（デザイナー）を講師に招き、取材の基本や紙面デザインなど座学やワークショップを織り交ぜながら、2020年8月から計18回の探究授業及び課外活動を実施しました。地域人へのインタビューやブックレットのデザイン編集では、学生10名が4チームに分かれ、

記者、カメラマン、編集者の3役をこなし、市職員が学生に伴走する立場で加わりながら、プロジェクトを進めてきました。

○インタビューを通じて伝わる地域人の想い

地域人へのインタビューでは、生徒1人が2人の地域人をインタビュー。「10年後（2030年）の目標や大町への期待」を共通する質問項目とし、仕事や活動の内容、現在に至った経緯、大町の好きなどところなど、学生それぞれの視点で様々な質問を地域人に尋ねました。最初は緊張して、うまく質問できない学生たちでしたが、地域人の皆さんが優しく迎え入れてくれたこともあり、徐々に慣れてきて色々なお話を伺うことができました。

地域資源（水や歴史的建物など）や地域の課題が活動の原点になっていたり、地域の魅力が移住やUターンのきっかけになっていたり、地域人の言葉の中には、地域に対する想いがたくさん込められていました。普段何気なく過ごしている地域の中には、素晴らしい魅力や歴史、文化がたくさんあることを、改めて気づかせてくれました。

○学生たちの地域への関心が高まる

取材の後は、インタビューしてきた内容から記事原稿を作成し、1冊の

ブックレットにまとめるためのデザイン検討に着手。チームごとに、表紙・裏表紙、巻頭ページ、インタビュー記事ページ、巻末ページを担当し、それぞれのデザインやレイアウトなど意見交換しながら創り上げてきました。インタビューを終えて自信をつけた学生たちからは、積極的に色々なアイデアや意見が出され、地域人の想いが伝わってくる素敵なブックレットができました。

完成したブックレットのお披露目も兼ねて、学生たちによるインタビュー成果の報告会を2021年2月に開催。当初、インタビューした地域人も招き、みんなで大町のこれからの考える「信濃大町100人衆会議」も開催する予定でしたが、コロナ禍の影響により、リアルでの開催を断念し、収録によるWeb配信を行いました。

発表会では、ずっと当たり前と思っていたことが地域の魅力なんだと知ることができた、商店街に対する印象が変わった、進学等で地域を離れてもまた戻ってきたい、など嬉しい言葉も聞くことができました。学生たちにとっては、たくさんの大人にふれ、地域人の話を聞き、その想いを知ることで、自ら地域を学び、地域への愛着や郷土愛を醸成する良い機会になったので

はと感じています。今後、学生たちも信濃大町100人衆の一人として大町の将来を担っていてくれることを期待します。

○未来ビジョンに向けた機運の醸成

大町を彩る地域人たちの想いがつまった「高校生による地域人紹介ブックレット」。地域人にとって、普段なかなか接する機会のない学生との対話は、自身の活動や地域に対する想いを言葉にする良いきっかけになりました。学生たちが聞き手となって、地域人の活動に光を当てることで、地域の魅力があぶりだされたとともに、地域

をもっと良くしたい、一緒に考えていきたい、といった地域に対する前向きな言葉も聞くことができました。

また、高校生たちの活動に伴走してきた市職員の皆さんも、信濃大町100人衆の一人として、改めて地域のことを考えるきっかけとなったと感じています。様々な部署が携わっていることもあり、最初は意思疎通が困難でしたが、徐々に自発的な意見だしや行動が増え、職員一人一人の部署を超えた連携につながっていきました。

コロナ禍により、授業の進め方や情報共有手段に制約がかかる中でのプ

ロジェクト実施となりましたが、市職員や学生、地域人たちの主体的なプロジェクト参画を促すことで、来年度から始まる未来ビジョン策定に向けた関係構築（お互いのことをまずは知る）のきっかけづくりに貢献できたのではないかと感じています。

完成したブックレットは、大町市商工労政課にて配布しています。また、大町市ホームページにも最終発表会の動画とともに掲載されていますので、興味のある方は是非ご覧ください。



今後の展開

2020年度は、信濃大町100人衆インタビューを通じて、まちづくりの第一歩を踏み出すことができました。大町市では、これからの大町を担うまちづくり人材の輪を広げる活動として今後も継続して取り組んでいく予定です。また、2021年度からは、インタビューして集まった地域人たち（信濃大町100人衆）とともに、大町の将来ありたい姿を描き、ともに創っていくための公・民・学が連携したまちづくりプラットフォームの構築、及び未来ビジョンの策定を進めていきます。UDC信州では、プラットフォームの構築や未来ビジョン策定支援を通じて、地域として、ビジョンを創って終わりではなく、ビジョンの実現に向けてまちづくりを実践していくことができる“持続的な体制づくり”をサポートしていきます。

KEY PERSON'S VOICE

コロナ禍で、先の見えない不安に包まれた令和2年。新しい生活様式や仕事のスタイルが変化し、当市にとっても新しいスタイルのまちづくりが始動しました。牽引してくださったUDC信州の皆様に感謝、感謝です。風の時代到来といわれる今、UDC信州のクリエイターチームの皆さんと共に新しい時代の風を見つけ、信濃大町の未来ビジョンを描いていきます。

大町市 建設課 松田紀幸さん

KEY PERSON'S VOICE

市職員と講師陣、UDC信州の皆さんと手探りで始めたプロジェクト。初めてのことはばかりでしたが事務局の運営を様々な面でフォローして頂き、おかげさまで一冊にまとめることができました。これからも宜しくお願いします！

美麻オリザ編集工房 稲澤そし恵さん

KEY PERSON'S VOICE

信濃大町100人衆の活動を通して、大町市の山と水は素晴らしい資源であると改めて感じました。また、UDC信州の方々から様々な角度からサポートして下さったおかげで貴重な体験ができました！ありがとうございました。

長野県大町岳陽高等学校 塩入木葉さん



諏訪市未来プロジェクト・諏訪湖イベントひろば利活用検討プロジェクト 諏訪市

【現状】

諏訪市は、諏訪湖、上諏訪温泉、諏訪大社、霧ヶ峰を擁し、年間600万人以上の観光客が訪れている観光都市です。2023年度中に諏訪湖周サイクリングロード、(仮称)諏訪湖スマートインターチェンジが完成予定となっており、今後の関係人口の増加に期待が寄せられています。

また、諏訪市は工業集積地でもあり、諏訪湖畔の諏訪湖イベントひろば(旧東洋バルヴ跡地：約7ha)においては、諏訪圏工業メッセが開催されるなど、諏訪地域のものづくり文化の発信や企業間連携などを促進しています。

しかしながら、人口減少率3.3%、高齢化率31%(総務省H30国勢調査)、空き家率23.3%(H25住宅・土地統計調査)となっており、定住人口獲得のためにも魅力的なまちづくりが求められています。

【UDC信州の支援】

こうした状況の中、UDC信州では市からの要請を受けて2019年10月から諏訪湖イベントひろば基本計画専門委員会の事務局に名を連ね、将来を見据えた当該地の利活用の方法や

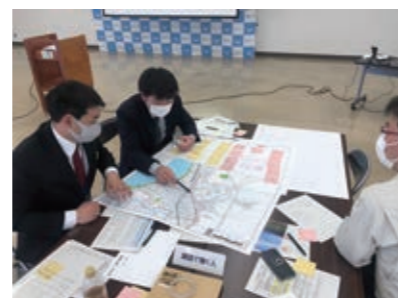
検討の進め方の提案を行っています。2020年度は、コロナウイルスの影響により、委員会を2回(7月、10月)しか開催できませんでしたが、当該ひろばにどのような機能を導入し、どのように活用すれば市民や来街者の皆さんに親しまれる場になるか、その際に既存の建屋はどのように取り扱うか、について議論を重ねてきました。そして、委員会で議論した内容を踏まえ、11月から1月にかけて民間事業者や市民の皆さんに対して「サウンディング型市場調査」を行い、多くのアイデアをご提案頂きました。

また、UDC信州では、前述のサイクリングロードやスマートインターチェンジの供用開始、諏訪湖イベントひろばの整備等により諏訪地域全体の都市環境が変わることを見据え、地域の歴史や文化・風土を活かした未来ビジョンを行政・市民一体となって創っていくことを市に対して提案し、その初動として市役所職員の皆さん向けのまちづくり勉強会を開催(12月、3月)しました。この勉強会は、日常業務において様々な分野を役割分担して取り組まれている市役所職員の皆さんが一堂に会すことにより、現在取り組んでいる内容やその背景、課題な

基本情報

- ① 諏訪市 ② 約48,000人 ③ 109km²
- ④ 諏訪湖、上諏訪温泉、諏訪大社上社本宮、霧ヶ峰高原
- ⑤ 諏訪大社式年造営御柱大祭、諏訪湖祭湖上花火大会
- ⑥ 味噌天丼、わかさぎ

- ① 市町村名 ② 人口(2021年4月1日現在) ③ 面積
- ④ 主な観光地 ⑤ 主な祭り
- ⑥ ご当地グルメ・郷土料理



庁内勉強会での議論



プロジェクト関係図

どを共有し、課題解決にむけて横断的な連携を生み出すことを目的として行ったものです。

【連携に向けた庁内勉強会】

第1回勉強会では、(株)日建設計総合研究所の西尾京介 首席研究員に講師となっただき、行政や市民、事業者等、多様な主体が同じ方向を向くことの重要性や、その手段として官民連携の必要性、行政側の役割等

についてお話をいただきました。

続いて第2回勉強会では、市役所職員の皆さんに、学生、諏訪で働く人、子育て世代、高齢者、観光客・外国人の立場になりきり、それぞれの視点から諏訪市の魅力や問題点、20年後の理想像や懸念などについてワークショップ形式で議論を行い、これまで市が取り組んできた成果の共有がされた一方で、中心市街地における駐車場や道路の利便性・安全性から商

店街が利用しづらい、などの課題も出されました。

人口減少、高齢化が進むこれからの時代においては、行政が整備・管理を全て行うことは困難であるため、魅力的な“まち”を創っていくためには、行政や市民、企業など様々な立場の“人”や“組織”が有機的に連携協力する必要があります。

今後の展開

UDC信州では、諏訪湖イベントひろばの利活用検討においても、未来ビジョンの検討においても、今後、実現性・持続性を兼ね備えたプロジェクトに仕立てていくことを念頭に、目標達成に向けた道筋や連携体制の構築の仕方などについて、地域の皆さんと一緒に考える、多角的な視点から提案する、“人”や“組織”を繋げる、といった役割を担っていきます。

KEY PERSON'S VOICE

市の中心に残された一等地、諏訪湖イベントひろばの整備に道筋を付けることが諏訪市長2期目の最重要課題です。産業振興機能を軸にし、コミュニティ、医療・健康、観光など異分野との掛け合わせによるひろばの価値向上や賑わいの創出については、民間活力導入を視野に検討中で、UDC信州の皆様には基本計画専門委員会の事務局の一員としてともに汗をかき、知恵を出していただき、大変お世話になっています。

また、近接する湖畔の観光エリアと上諏訪駅を直結する柳並線が開通し、湖周サイクリングロードや諏訪湖サービスエリアのスマートインターチェンジの設置など整備進行中の関連事業と上諏訪駅周辺まちなか全体のリフォームについても、国交省「官民連携まちなか再生推進事業」の活用にご尽力頂き感謝しています。魅力あふれる諏訪の未来ビジョン等の新規策定に向けたエリアプラットフォームの構築など、引き続きUDC信州の皆様のお力添えをよろしくお願い致します。



諏訪市長 金子ゆかりさん



しなの鉄道沿線地域の回遊性向上プロジェクト 小諸市 東御市 上田市 千曲市

【現状】

しなの鉄道（しなの鉄道線）の沿線には8市町に駅があり、年間2,400万人の観光客が訪れていますが、その内訳をみると8割が新幹線駅のある自治体（軽井沢町、上田市、長野市）に偏っています。

しかし、御代田町の浅間国際フォトフェスティバル、小諸市～坂城町エリアに点在するワイナリーやレストラン、千曲市の戸倉上山田温泉や姨捨の棚田など、しなの鉄道沿線地域には、魅力的な資源（拠点）が多数存在しています。

もちろん、現在でも各拠点にたくさんの観光客が訪れていますが、その多くは自家用車での来訪であり、公共交通で訪れる方々に必要不可欠な「二次交通の整備」が共通する課題となっています。

UDC信州では、二次交通の課題を解決することで、当エリアのポテンシャルをさらに引き出せるだけでなく、

広域でのまちづくりを考えるきっかけにもなると考えています。

【UDC信州の支援】

当エリアは全体で1,986km²（東京都2,188km²とほぼ同じ広さ）と広く、最初からエリア全体を対象としたプロジェクトの組成は難しかったことから、UDC信州に交通関係の相談があった小諸市、東御市、上田市、千曲市のエリアに絞って支援をスタートしました。

最初に進めたのが4自治体+しなの鉄道のメンバーで構成する「しなの鉄道沿線地域まちづくり勉強会」の設置です。鉄道でつながっているとはいえ、自治体同士の情報交換の場は少ないのが現状だったので、「まずは、お互いの自治体のことを知り、その上でエリアのポテンシャルについて考えよう」と、月1回の勉強会を開催しました。まち歩きを通じてエリアのことを学んだり、各自治体で進めている施策の情報交換をしたり、長野県のような情報を発信している雑誌「KURA」

基本情報

- ① 軽井沢町、御代田町、小諸市、東御市、上田市、坂城町、千曲市、長野市、(佐久市)
- ② 約716,000人（8市町合計）
- ③ 1,986km²（8市町合計）
- ④ 軽井沢高原、浅間高原、懐古園、湯の丸高原、上田城、さかき千曲川バラ公園、戸倉上山田温泉、善光寺

※2020年度の活動エリアは4市ですが、参考に沿線全体の基本情報を載せています。

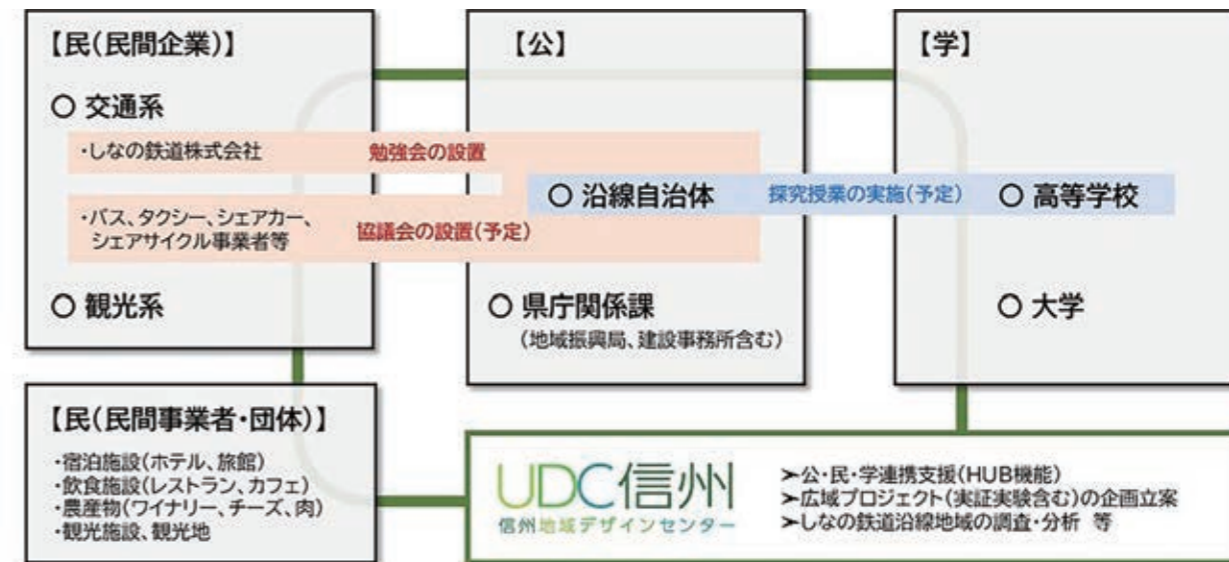
- ①市町村名 ②人口(2021年4月1日現在)
- ③面積 ④主な観光地



勉強会メンバーでまち歩き

沿線自治体	人口(人)	観光客数(百人)			新幹線駅
		県内	県外	合計	
軽井沢町	19,165	16,332	67,900	84,232	○
御代田町	15,396	930	1,128	2,058	
小諸市	41,359	4,968	9,924	14,892	
東御市	29,305	9,131	8,600	17,731	
上田市	153,612	22,639	22,183	44,822	○
坂城市	14,247	329	57	386	
千曲市	59,054	7,617	6,187	13,804	
長野市	369,097	55,072	48,973	104,045	○
合計	701,235	117,018	164,952	281,970	

【出典】 人口：毎月人口異動調査（2020年3月分）
観光客：令和元年観光地利用者統計調査結果



プロジェクト関係図

を発行している株式会社まちなみカントリープレスの荒川主宰からエリアのポテンシャルについて教えていただいたりしました。

エリアのことを知ったことで、あらためて「二次交通が重要」という共通の課題が持たれたことから、大きなテーマとして「しなの鉄道沿線地域のM

aaS化^{※1}」を検討することになりました。エリアの各拠点情報が一元化され、それらを周遊するために整備された複数のモビリティをスマホひとつで乗り継ぐことができるといったイメージですが、地域の実情をしっかりと把握した上で、どのように具体化していくかを考えていきたいと思ひます。UD

C信州では、引き続き公・民・学連携の支援、広域プロジェクト（実証実験含む）の企画立案、大学等と連携したエリアの調査分析などを行っていく予定です。

※1MaaS (Mobility as a Service) : ICT (情報通信技術) を活用し、バスや電車、タクシー、飛行機など、自家用車以外のすべての交通手段による移動を、ひとつのサービスで完結させるもの。

今後の展開

2021年度は、エリア内で複数の実証実験を予定しています。キーワードは「連携」と「モビリティ」。UDC信州は自治体の枠にとらわれないことが強みのひとつでもあるので、広域周遊や広域での拠点間連携などを意識して企画を考えています。また、モビリティについても、従来のバスやタクシー、デマンド交通だけでなく、シェアサイクルやカーシェア、グリーンスローモビリティ、EVバスなども取り入れながら、単なる移動手段としてのモビリティから、周遊の楽しさを高めるモビリティにするための工夫も考えています。

なお、広域MaaSを考える際に連携しやすい「観光」からスタートしますが、将来的にはそれらのモビリティが地域交通となり、地域に暮らす方々にとっても必要不可欠なものになることを目指しています。とはいえ、モビリティはあくまで手段ですので、この地域に暮らす方がどんな暮らしをしたいか、訪れる方がどう楽しみたいかを、様々な方と一緒に考えていきます。

KEY PERSON'S VOICE

「レンタサイクル」から「シェアサイクル」への移行を検討している中で、UDC信州のサポートにより、シェアサイクル先進地の金沢で運営者や市役所担当者に話を聞くことができ、今後の事業展開が現実味を帯びてきました。

上田市都市計画課 堀内和幸さん

KEY PERSON'S VOICE

UDC信州さまと一緒にしなの鉄道沿線地域を楽しく盛り上げて、ワインをきっかけに飲食店や宿泊施設など、地域経済にも貢献できればと考えております。

長野ワイントラベル 前澤知江さん

基本情報

- ①岡谷市 ②約48,000人 ③85km²
 - ④諏訪湖、岡谷蚕糸博物館、イルブ童画館、鳥居平やまびこ公園、横河川の桜アーチ、スカイラインミュージアム
 - ⑤岡谷太鼓まつり、とうろう流し・花火大会、鶴峯公園つつじ祭り、小坂公園あじさい祭り、出早公園もみじ祭り
 - ⑥うなぎ、地酒（神渡・高天）、味噌
- ①市町村名 ②人口(2021年4月1日現在) ③面積
④主な観光地 ⑤主な祭り
⑥ご当地グルメ・郷土料理



岡谷市内を走るシルキーバス

シルキーバス利便性向上プロジェクト 岡谷市

【現状】

岡谷市は、かつて「SILK OKAYA」の名が世界に響き渡り、国内では「糸都岡谷」と呼ばれ、明治時代より一大生産地として栄えた製糸産業の社屋や工場等の近代化産業遺産、昭和初期に生産量日本一だった味噌づくりの工場や蔵等の魅力的な建物がまちなかに点々と残っています。

一方で、大型店の相次ぐ撤退、人口減少や高齢化（人口減少率6%、高齢化率34%（総務省H30国勢調査））の進展により、中心市街地の賑わいの停滞、空き店舗や空き家の増加が問題となっています。

また、市内を走るコミュニティバスの利用者数も年々減少傾向にあり、運行事業補助金の増加が市財政の大きな負担となっています。今後、更なる高齢化の進行、運転免許証の自主返納の増加等に伴い、コミュニティバスの利用機会の増加が見込まれる中、利便性の向上に向けて如何に利用者の

ニーズに合ったルート設定及びダイヤ編成が組めるかが課題となっています。

【UDC信州の支援】

現在のバス乗降調査は、任意に定めた一定期間において、調査員による調査が行われていますが、季節・天候や利用者の生活サイクルによる変化などのデータは取ることができていません。

岡谷市が目指す利便性の高い公共交通網を実現するためには、利用者のニーズに合ったルート設定やダイヤ編成が必要であり、2020年度はどうやら年間を通して利用実態データを取得できるのかを検討し、NECの技術協力を得ながら映像解析技術を用いた乗降調査の社会実験にチャレンジしました。

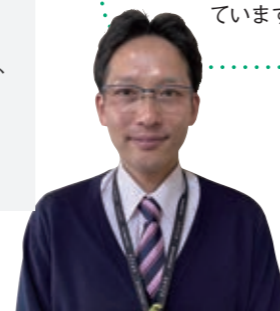
この社会実験は、マイクロバスへの映像解析技術の応用が可能かどうかを検証したのですが、機器類の設定や調査結果については一定の成果が得られた一方で、技術的な課題も見えたところでした。



プロジェクト関係図

KEY PERSON'S VOICE

バスの乗降調査は、ダイヤ編成やルートを検討する上で重要な調査ですが、年間を通じて調査するのは現実として難しい状況です。今後、NEC、UDC信州の皆さんと技術が確立できれば公共交通全体の見直しに有効なデータとなると期待しています。



岡谷市産業振興部 商業観光課 今井康貴さん

今後の展開

今後、利便性の高い公共交通網の実現のために必要なデータの種類の精度を見極めながら、基礎データの取得・解析、公共交通の種別の選択、ルートの設定等について、NECの協力を得て岡谷市とともに検討を進めていきます。

基本情報

- ①佐久市 ②約98,000人 ③423km²
 - ④びんごろ地蔵、旧中込学校、龍岡城五稜郭
 - ⑤佐久バルーンフェスティバル、佐久鯉まつり
 - ⑥佐久鯉、市内11蔵の地酒
- ①市町村名 ②人口(2021年4月1日現在) ③面積
④主な観光地 ⑤主な祭り
⑥ご当地グルメ・郷土料理



空から見た長野県民佐久運動広場（野沢地区）

長野県民佐久運動広場利活用検討プロジェクト 佐久市

【現状】

佐久市は長野県の東端、県歌「信濃の国」に歌われる佐久平の中心に位置する高原都市です。北に浅間山（上信越高原国立公園）、南にハケ岳連峰を望み、蓼科山・双子山（ハケ岳中信高原国立公園）に囲まれ、千曲川が市の中央部を南北に貫流する自然環境に恵まれた場所であり、その豊富な清流により育つ佐久鯉は代表的な名産となっています。

また、北陸新幹線、上信越自動車道が東西に走り、首都圏へのアクセスも容易なことから、通勤・通学圏として注目され、テレワークや佐久で起業し、必要な時だけ東京へ、といったライフスタイルを選ぶ人も増えてきています。

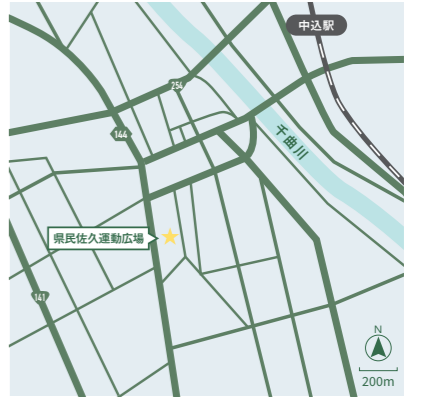
しかし、全国的な少子高齢化にもれず、佐久市においても人口減少が逼迫した課題となっています。佐久市では、地域ごとの特徴を活かした「機能集約・ネットワーク型まちづくり」を推進することで、一定程度の人口密度を

維持し、将来にわたって持続可能なまちづくりを図ろうとしています。

【UDC信州の支援】

その中心拠点のひとつである野沢地区では、現在、野沢会館（生涯学習センター）の改築や公共施設の再配置が検討されていますが、この機会に今後どんなまちにしたいか、まちづくりの方向性を多くの主体で共有し、同じ方向を向いて具現化していこうという中で、地区内にある「長野県民佐久運動広場」の再整備・活用を市民の方と一緒に考えたいというご相談がありました。

今年度は、まちづくり専門家とのマッチングを行い、UR都市機構のまちづくり支援専門家制度を活用してワークショップの西村浩氏に検討に参加していただき、地域の方々とワークショップを行いながら、広場の整備内容の検討と、維持・管理までを自分事として携わってくださる地域の担い手探しを進めてきました。



プロジェクト関係図

KEY PERSON'S VOICE

行政主導ではなく、民主導での広場整備を検討するにあたり、行政として新しい取り組みに戸惑う中、UDC信州からの客観的な助言をいただき不安が解消されました。引き続きまちづくりにおけるサポートをお願いします！



佐久市建設部 都市計画課 鷲見学さん

今後の展開

今後、この広場が野沢地区の誰もが愛着を持って活用し、地域の価値を向上する拠点となるよう、計画・整備・活用の道筋や、周辺の公共施設・商店街等との連携、行政と地域の協働体制の構築の仕方などについて、専門家とUDC信州とで地域をしっかりサポートしていきます。

基本情報

- ①東御市 ②約30,000人 ③約112km²
- ④海野宿、湯の丸高原、芸術むら公園
- ⑤雷電祭り〜東御どすいSUNSUN〜、巨峰の王国祭り、天空の芸術祭
- ⑥くるみ、巨峰、ワイン、八重原米

- ①市町村名 ②人口(2021年4月1日現在) ③面積
- ④主な観光地 ⑤主な祭り
- ⑥ご当地グルメ・郷土料理



東御中央公園の芝生広場

公園利活用検討プロジェクト 東御市

【現状】

東御市は、長野県東部、標高約470m〜2,200mに跨り、年間を通じて日照時間が長い寡雨地域であり、豊かな自然や山並みの眺望に優れた暮らしやすい地域です。

【UDC信州の支援】

そんな東御市からのご相談は、市の行政改革推進計画に基づく、東御中央公園の適正な管理促進と維持管理経費の削減でした。近年ではPark-PFI等の手法により民間企業が管理運営を行う事例が増えており、市としても同様の方向で検討したい意向でしたが、

UDC信州としてはまず、「どんな場所にしたいのか」を考えることを提案し、その検討材料として全体で18haの公園のうち芝生広場や森林等の約7haを4つのゾーンに区分して時間帯ごとの利用者数や利用者の行動、公園利用に関するアンケートなどの調査を市とともに実施しました。コロナや天気の影響により、2020年度は夏季の平日のみの調査において、運動に来る人、子どもと遊びに来る人など様々な利用者の方々から頂いた意見により、この公園の日常利用者の満足度は極めて高いことが見えてきたところです。



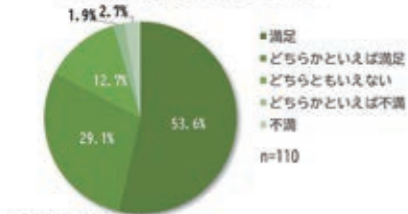
KEY PERSON'S VOICE

東御中央公園は、子供から大人まで幅広い年齢層が集まる公園として多くの人に利用されています。現在、東御市は中央公園の魅力をもっと高めていくためPark-PFIの活用等による公園づくりを研究しています。今年度は、UDC信州の皆さんと共同で利用者アンケートを実施しました。今後も利用者のニーズ合った魅力ある公園を目指していきます。

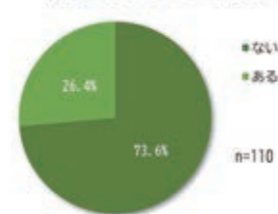


東御市都市整備部建設課都市計画係 鈴木優さん

Q1. 利用するにあたって、この公園の状態は満足ですか？



Q2. 現在の東御中央公園に不足しているものはありますか？



その他関連ご意見
 ・魅力は「芝生がきれいな、広い」「緑が多い」「歩いていて気持ちいい」「噴水や遊具で子どもを遊ばせられる」等
 ・「不満」「どちらかといえば不満」と答えた利用者でも週2〜3回以上利用している。
 ・不満な理由は「トイレ」（トイレの水漏が汚い、手を洗う気がしない、トイレが分かりづらい）
 以前設置されていた「木の遊具、アスレチックが無くなった」等

夏季平日におけるアンケート結果（抜粋）

今後の展開

前述のとおり、夏季の平日しか調査できておらず、日常的な利用者の声だけしか聞いていません。今後も利用者データを補完すべく継続して利用実態調査を実施するとともに、「どんな場所にしたいのか」について利用者の声を聞きながら検討する場をつくっていきけるよう、市をサポートしていきます。

基本情報

- ①須坂市 ②約50,000人 ③約150km²
- ④臥竜公園、米子大瀑布、峰の高原、須坂市動物園、須坂温泉、仙仁温泉
- ⑤カッタカタまつり、臥竜公園桜祭り、わくわくおひなめぐり
- ⑥みそすき井、巨峰、シャインマスカット

- ①市町村名 ②人口(2021年4月1日現在) ③面積
- ④主な観光地 ⑤主な祭り
- ⑥ご当地グルメ・郷土料理



須坂市内のまちなみ

まちの元気創出プロジェクト 須坂市

【現状】

須坂市は、長野県北東部に位置し、肥沃な土壌と雨が少なく1日の気温差が大きい気候条件から、果実栽培（ぶどう、りんご等）が盛んな地域です。また、明治から昭和初期にかけて製糸業で栄えたことから、当時の繁栄を偲ばせる土蔵や大壁造りの商家が残り、蔵の街としても知られています。

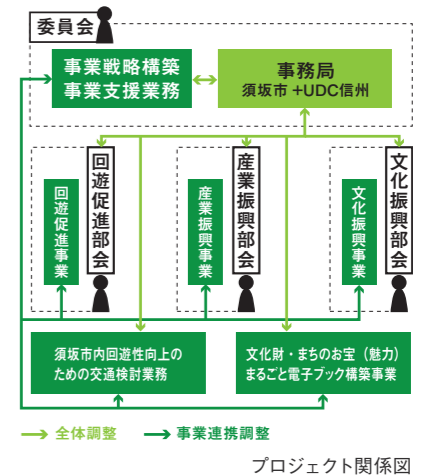
しかしながら、市域に豊富に存在する有形・無形文化財や史跡、市内外の人々が交流する拠点などが「面」として構成されていないため、地域の魅力として十分に活かされておらず、若者をはじめとする地域の将来を担う人材の流出や、来訪者に対して「須坂市の魅力」を伝えられる市民が少ない、等の課題を抱えています。

【UDC信州の支援】

こうした現状を踏まえ、須坂市では、まちの多様な文化が人を育てるという

認識のもと、市域全体を博物館と捉え、市域のあらゆるところで文化に触れることにより、市民が地域に誇りを持ち、まちの価値を向上する「まるごと博物館構想」を核としたまちの元気創出事業に、地元様々な団体と市で組織する委員会により2020年度から3 年の予定で取り組んでいます。

初年度である今年度は、現状のデータ分析、戦略資源の設定、ターゲット設定、エリア戦略などから全体の事業戦略を立て、文化振興と市民の地域に対する愛着醸成を検討する文化振興部会、観光消費の増加と新規雇用創出を検討する産業振興部会、人の流れと循環を検討する回遊促進部会の3部会において2021年度以降のプロジェクトの組み立て等を実施しましたが、UDC信州はこれらの部会運営のサポートやプロジェクト等の検討内容についてのアドバイスを行ってきました。



KEY PERSON'S VOICE

庁内を横断し、民間事業者と市民を交えた壮大な事業が2020年にたちあがり、UDC信州の皆さんには組織作りから携わっていただき何とか進めてまいりました。事業を俯瞰した適確なアドバイスにいつも助けていただいています。

須坂市文化スポーツ課文化振興係 坂田亜弥さん



今後の展開

2020年度の議論を踏まえ、2021年度は地域交流拠点の整備やキャッシュレス・ECの導入、利便性の高い公共交通の検討など、さまざまな分野に目を配りながら全体を俯瞰しつつ、須坂市のサポートを続けていきます。

UDC信州では昨年度に引き続き「公・民・学」連携を現場で進める「まちづくり人材」を増やすため、行政職員やまちづくりに携わる企業・団体のみなさまのニーズに合わせたまちづくりセミナーや設立1周年シンポジウムを開催しました。コロナ禍のためビデオ会議ツールや動画配信サイトを活用して実施した内容を紹介します。



6/4 まちづくりセミナー #2

新しい移動手段とまちづくり

初のオンライン開催となった第2回では、3名の講師をお招きし、民間企業と自治体が連携して検討・実証している事例を紹介していただきました。

トヨタ自動車株式会社の北村氏からは、様々な移動課題に対し、自動車販売だけでなく、自動運転やMaaSなどの新たなサービスで人々の移動を助けるほか、地域と連携して、医療や災害など様々な分野で新たなサービスを提供している事例について。アイシン精機株式会社の野々山氏からは、愛知県豊明市で有償実証実験中であるデマンド交通「チョイソコとよあけ」の導入から運営、今後の展開について。そして、長野県企画振興部先端技術活用推進課の中村氏からは、長野県と小海町・南相木村で取り組んでいる「貨客混載」の実証実験についてお話をお聞きました。

全国トップ3に入る道路延長を有する長野県にとって「交通」の話は重要なテーマのひとつですので、今後も継続的に話を聞きつつ、県内で新たなサービスの実装を進めていきたいと思えます。



10/26 まちづくりセミナー #3

ワークブルエリアの創造と新たなまちづくりプロセス

第3回は全国各地で賑わい空間を創出している、有限会社ハートビートプランの泉氏に、新たなまちづくりのプロセスについて説明していただきました。

これまでのまちづくりは、「つくる目線」のプロセスで、ビジョンづくりに運営主体が入っていないことが多く、計画しても事業が立ち上がらないことが多い。一方、これからのまちづくりは、「つかう目線」のプロセスが望ましく、初めから運営・マネジメントする主体を加えて一緒にビジョンをつくり、LQC (Lighter, Quicker, Cheaper 簡単に、素早く、安く) での実証実験により事業性の確認を行なったうえで、使われるものをつくっていくことが必要と話されていました。

UDC信州でも「つくる目線」ではなく、「つかう目線」を常に意識すること、より多くの方々を巻き込みながらワクワクするビジョンやプロジェクトをつくっていくことが必要だと感じました。



11/16 まちづくりセミナー #4

チョイソコ現地視察

第4回は、第2回セミナーで紹介されたアイシン精機株式会社のデマンド型乗り合い送迎サービス「チョイソコ」の現地視察として、希望する自治体の職員の方々と2020年11月に愛知県豊明市にて実施しました。

全国各地で展開されている「チョイソコ」のオペレーション管理を一括して担っているイノベーションセンター（愛知県刈谷市）のコールセンター室や、愛知県豊明市にて運行されている「チョイソコとよあけ」への試乗による車両内部やバス停の設置状況など視察させて頂くことができました。

高齢者の外出促進と健康増進を目的に運行されているデマンド交通として、利用者（高齢者）へのきめ細やかなオペレーション対応や、官民が連携して企画されている多種多様なイベント（コトづくり）の数々など、単なる移動手段としてではないデマンド交通の役割を改めて学ぶことができた機会となりました。



21/2/26 まちづくりセミナー #5

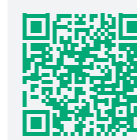
災害に強いまちづくり①



▲アーカイブ

21/3/3 まちづくりセミナー #6

災害に強いまちづくり②



▲アーカイブ

近年、国内では大規模災害が度々発生しており、県内でも「令和元年東日本台風（台風第19号）」は記憶に新しく、現在でも復旧・復興は継続中です。「防災」は、平時からどのような取り組みを行い、どのように危機管理をするか、また、常に住民の防災意識を醸成することが重要なことから、「災害に強いまちづくり」をテーマにまちづくりセミナーを開催しました。

第5回の登壇者は、あいおいニッセイ同和損害保険株式会社、日本ユニシス株式会社、NHK長野放送局の3社です。各社には「災害による被害予想」「IoTを活用した災害対策」「命を救う災害報道」等についてお話いただきましたが、防災や災害対策に「これで100%安心」という対策はなく、日々変わっていく災害規模や条件に対応しながら、新しい技術や考えを取り入れている現状を知ることができました。なお、質疑応答の中で「無償で使えるシステムを組織内で紹介し展開した」という話もあったことから、県内の自治体でもそのような取り組みが進むように案内をしていきたいと思いました。

第6回では「災害に強いまちづくり②」として、まずは、信州大学地域防災減災センターの菊池聡氏より、「防災・減災のための心理学～防災・減災行動を促進するポイント～」についてお話を頂きました。

災害というリスクに対するリスク認知のメカニズムとそれを自覚したうえで望ましい選択肢を自発的に選択させる手法（NUDGE）をご紹介頂きましたが、発災時を振り返ると「確かに！」と思わされることばかりで、大変勉強になりました。

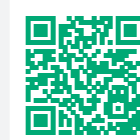
また、NPO法人プラス・アーツの永田宏和氏より、「楽しみながらしっかり学ぶ新しい防災のカタチ～イザ！カエルキャラバン！などを事例に～」と題して、主な活動をご紹介頂き、地域の防災力アップに重要な考え方を教えて頂きました。

単なる防災訓練でなく、地域において子どもからお年寄りまでが楽しみながら取り組んでおり、それが世代間交流を生み、強いコミュニティをつくっていることは他に類を見ない取り組みではないかと思えます。



9/1 設立1周年シンポジウム

危機を転機にかえるまちづくり



▲アーカイブ

信州地域デザインセンター（UDC信州）は設立から1周年を迎え、シンポジウムを2020年9月1日に開催しました。

今回のシンポジウムはコロナ禍の影響により、初めて登壇者、視聴者ともオンラインで集い、UDC信州の活動報告を行うとともに、コロナ禍により変化する私たちの生活を踏まえて「危機を転機にかえるまちづくり」をテーマとして、東京大学まちづくり研究室の小泉秀樹教授による基調講演、公・民・学の立場の方々とのトークセッションを行いました。

コロナ禍は生活に制約をもたらしており、改めて都市の本質について考え直す機会となっています。この転機を新しい成長の糧にする、かつ乗り越えていくために、どのようなライフスタイル構築や、まちづくりを行えばいいのか、公・民・学それぞれの立場から話し合いました。

未来や、新たな価値について思考することはUDC信州の役割のひとつであり、今後のコロナ禍による生活について議論は尽きませんが、多くの視点を得られたシンポジウムとなりました。

UDC信州では、まちづくりに関する多種多様な情報を集約し、発信することを重要な活動の一つとしています。2020年12月に公式webサイトを立ち上げ、これまで以上に様々な情報を発信してきました。ここでは信州で魅力的な活動をしている方にインタビューする「あるつくトーク」を紹介します。



12/10 公式webサイトがオープンしました!
<https://udcshinshu.jp/>
UDC信州の活動報告やまちづくり情報を
随時更新しています。是非ご活用ください。

Vol.1



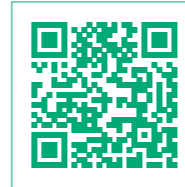
とおやまたけゆき
遠山健幸さん
/長野市市街地整備課係長

長野の街のど真ん中! 地域で使いたおす公園の仕掛けと誕生秘話!

2020年5月7日に長野駅から善光寺に続く中央通り沿いにオープンした公園「ながの表参道セントラルスクエア」をご紹介します! 企画段階から力を入れてご担当されている遠山さんの想いやこだわり、公園の楽しみ方など、細かく解説いただいています。

まちなかに公園が少ない長野市街地。セントラルスクエアは憩いの場として絶賛活躍中です!
(2020.7取材 インタビュアー: 中平/動画編集: 佐久間)

▼紹介ページ



Vol.4



いなさわひろし え
稲澤博さん・そし恵さん
/美麻オリザ編集工房

現代版お百姓さん! 都会から移住したご夫婦+ 1匹の美麻ライフ

大町岳陽高校地域探究授業「信濃大町100人衆インタビュー」の講師としてもご活躍の美麻オリザ編集工房の稲澤博さんと稲澤そし恵さん。それぞれの得意を活かしながら百姓的に暮らしており、愛犬・てんてんはモンキー犬として獣害対策にも貢献! 都会から田舎に移住して起きた価値観の変化など、お二人の柔和で和やかな雰囲気とともにお送りします!
(2020.10取材 インタビュアー: 動画編集: 佐久間)

▼紹介ページ



Vol.2



おぐちりょうへい
小口良平さん
/スワヤツサイクル代表

世界157ヵ国を旅した自転車冒険家にお聞きする信州の魅力!

8年半かけて世界157ヵ国を自転車で一周した自転車冒険家の小口良平さん。世界一周をするきっかけや、偉業を成し遂げるために自身に課した苦しい日々のお話。世界を見てから地元に戻ったことで気づいた信州ならではの魅力から自転車を活かしたまちづくりの構想など、今すぐにでも旅に飛び出したいくなるような、ワクワクするお話の数々をお楽しみください!

(2020.9取材 インタビュアー: 倉根/動画編集: 佐久間)

▼紹介ページ



Vol.5



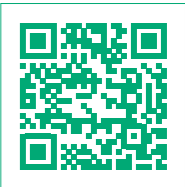
いでまさおみ
井出正臣さん
/井出建設興業 代表取締役

ご縁を大切に。佐久穂町での魅力掘り起こしケーススタディ

どこか懐かしさもあるような、信州の中ではどこにでもあるようなまちなみの「長野県南佐久郡佐久穂町」で、何足ものわらじを履きながらバイタリティ溢れる地域活動をされている井出正臣さん。「自分ができること」を人と人とのつながり、ご縁を大切にされながら佐久穂町で実践していることや熱い想いをたくさんうかがいました。

(2020.11取材 インタビュアー: 東城/動画編集: 佐久間)

▼紹介ページ



Vol.3



あかはねこうた
赤羽孝太さん
/Oと編集社 代表理事

寂しかった商店街に1日で4,000人が来訪! その仕掛けとは?

2019年12月辰野町の商店街にあった21の空き店舗・空き家を利用して開催された1日限定のトビチマーケット。「10年後の1日を前借りする」をコンセプトに行われ、県内外から54店舗が出店、4,000人を超えるお客さんが訪れました。この仕掛け人である赤羽さんから商店街や地域の盛り上げ方、空き店舗・空き家のリノベーションなどがうかがってきました!

(2020.9取材 インタビュアー: 倉根/動画編集: 佐久間)

▼紹介ページ



Vol.6



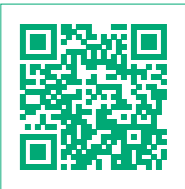
すぎやまゆたか
杉山豊さん
/長野県地域おこし協力隊

今悩んでいる人たちを笑顔に! 笑顔の循環で地域づくり

長野県の南信州に移住され、現在「長野県地域おこし協力隊」としてご活躍されている杉山豊さん。地域おこし協力隊員の活動を通じて広がった様々な出会いや取り組み、家族のための家族によるwaratte事業での夫婦カウンセリングのお話などなど、周りの人たちを惹きつけ、元気にする杉山さんの溢れる魅力! のほんの一部をお伝えできればと思います!

(2020.12取材 インタビュアー: 征矢/動画編集: 佐久間)

▼紹介ページ



おわりに

UDC信州スタッフより 2020年度の振り返りと新任スタッフご挨拶



センター長
出口 敦
東京大学

令和2年度はコロナ禍の中、県下の市町村の方々の活発な情報交換や意見交換を通じて各地域の課題や構想などの把握を経て、UDC信州が具体的なまちづくり支援に戦略的に取り組む素地をつくり上げて頂いた1年であったとも言え、今後の具体的な支援に繋げていくこととなります。市町村や県庁の方々、各地のまちづくりの関係者の方々には今後も引き続きのご協力をお願いを申し上げます。



副センター長
三牧 浩也
東京大学

雪崩を打って社会の変化が加速した2020年。地方の豊かさや可能性が、魅力的なプレイヤーたちの活動を通じて広く共有されつつあります。こうした動きから、従来のまちづくりの仕組みを変革することこそ、UDC信州の役割なのだろうと、3年目に入ったUDC信州の活動を通じて感じます。より軽やかにでもしっかりと、次の1年に歩みを進めていきたいと思います。



コーディネーター
荒川 清司
株式会社まちなみ
カントリープレス

公・民・学が連携したまちづくり支援とは？なかでも民の役割は何かを考える1年でした。幸い、主宰する情報誌『KURA』で県内各地の地域おこし取材しているので情報発信ができ、各プロジェクトの牽引役となる人物にスポットをあてられました。行政や地域の顔役が主体の事案が多くなかで、地域住民の本音を伝え、具現化できるように助言できればと思います。



コーディネーター
倉根 明徳
長野県

新型コロナに振り回された1年でしたが、一方でオンラインの活用が進み、リアルで会う大切さを実感することもできました。担当案件では、関係者の共創により思っていた以上の進捗があったものもあり、次の展開が今から楽しみです！なお、プライベートでは、小6の長男がコーヒースタンドを起業して順調に売り上げを伸ばしているの、負けないように頑張りたいと思います！



副センター長
林 靖人
信州大学

広域UDCってどうなるんだろう!? スタート時は、何が生まれるかわからないドキドキの種まきでも、徐々に茎や花が見えてきて、実が育ち始めていると感じております。UDCは未知の種を蒔き・育てる挑戦的な役割として地域の様々な機関の“枠”を超える存在になるはず。第3期は今まで以上に一歩進んだ具体的な取り組みや事業創出に挑戦したいと思います。



チーフコーディネーター
[2020.4-2021.3]
高野 佳敏
長野県

広域的な視点を持ち、人と人を繋ぎ、まちづくりを支援する。そんな思いを持ち活動が本格化した1年。試行錯誤しながらも少しずつ結果に結びつく取組みができたかと思えます。また様々な方にセンターにお越しいただき、UDC信州が人や情報が集まる場になりつつあると実感しています。今後も人や情報のハブとなり、様々な角度からまちづくりに貢献したいと思います。



コーディネーター
[2019.8-2021.3]
中平 眞裕
UR都市機構／長野県

UDC信州も2年目。今年は「UDC信州の存在意義」を自問自答してきた1年でした。結局、自分の中で明確な結論を出すまでに至りませんでした。市町村職員やその地域の皆様とたくさん会話を重ね、繋がりを持たせて頂くにつれて、臍気ながら形が見えてきた気がしています。あったらいい組織ではなく、なくてはならない組織にすべく、自問自答はまだまだ続きます。



コーディネーター
征矢 悠
長野県

UDC信州のメンバーとなって初めての1年でしたが、多くの方々につながる機会を頂き、リアル・オンライン含めまちづくりの議論をさせて頂くことができました。担当案件では、まだまだ未熟な私に様々な方々からサポートを頂き、一歩ずつプロジェクトを前に進めることができたと感じています。今後も関係者の皆さんと一緒に悩みながら、まちづくりを頑張ります！



コーディネーター
東城 葵
長野県

人と人の繋がりの大切さを人生で一番とっていいほど痛感した1年でした。何かを変える、創り出すことの難しさ…まちづくりはヒトでできていると言っても過言ではない気がします。そんな中で私は、UDC信州は何ができるのか…手探りながらやってきましたが、まだまだです。少しずつ築かれ始めたものを大事にこの先もがむしゃらに走り抜きたいと思えます！



アドバイザー
新 雄太
東京大学

会いたい、話したい、繋がりたい！とこれほどまでに感じた年はありませんでした。それでも歩みを止めず、この難局を様々な創意工夫で乗り越えようとしている姿を信州各地で目にし、まさに「有るを尽くす」助け合い・支え合いに勇気をもらっています。変革社会に柔軟に応えながらも、地域に寄り添い、空間・時間・関係をこれまで以上に紡いでいきたいです。



コーディネーター
UR都市機構

UDC信州の前向きな活動に確かな成長を感じつつ、刺激を受けながら、一緒に悩み、考え、学び、経験を重ねた1年でした。「連携により新たな価値を創る」、URは引き続きこの理念に賛同し、UDC信州を通じて長野県のまちづくりを応援していきます！



コーディネーター
佐久間 圭子
長野県

「あなたもまちづくりの一員です！」と言われてUDC信州に加わってから早1年。試行錯誤の繰り返しでコロナもまちづくりも全部同時に相手をするようになって、むしろこれが自分にとってUDC信州の活動として板についてきました。「もっと良くできること」を追い求めてこれからも多くの方と繋がっていきたくです！まちづくり奥深すぎ！



アドバイザー
山下 裕子
まちなか広場研究所

都道府県単位が運命共同体であることが、ありありとした本年度。UDC信州では毎週水曜日午後、2時間強の打ち合わせを実施している。現地での活動が叶うことがほとんどなかった一年であったが、常駐する仲間から進捗を拝聴し、信州に想いを馳せ、他都市の事例やアイデアを共有し重ねた時間。濃き高き各々の地域性が交わったときの化学反応が、楽しみで仕方ない。



2021年度新任スタッフからご挨拶



チーフコーディネーター
かわはら てるひさ
河原 輝久
長野県

設立3年目を迎える2021年、4月からUDC信州のメンバーとなりました。これまでの職場経験から改めて信州の多様な風土、文化と自然環境のすばらしさを感じています。その中で、「まちづくりは、ひとづくりから」をモットーに、オープンな雰囲気でも多様な連携のもと、地域の特色を活かした信州ならではのまちづくりの取組みに対するお手伝いができればと思っています。



コーディネーター
にしざわ かずお
西沢 和生
UR都市機構／長野県

令和3年4月よりUDC信州のメンバーになりました。出身地の長野でまちづくりに携わることは非常に楽しみです。長野県は、地域ごとに文化や風習も違い、街の成り立ちも、城下町、宿場町、門前町など多様です。それぞれのきらりと輝く何かを発見し、まちづくりに反映していくことが我々の役割だと思っています。地域の方々との協力し良いまちづくりを創っていきましょう。

UDC信州

信州地域デザインセンター

8:30~17:15 (土・日・祝祭日休)

〒380-0832

長野県長野市東後町16-1 2階

TEL 026-405-4861

MAIL info@udcshinshu.jp

WEB <https://udcshinshu.jp>

f @udcshinshu @udcshinshu @UDCshinshu

長野駅より徒歩16分

※お車で越しの際は、近隣のコインパーキング等をご利用ください。



◀ 公式WEBサイト

